

2022/10/6

野口里佳 不思議な力

Noguchi Rika: Small Miracles

2022 年 10 月 7 日（金）－2023 年 1 月 22 日（日）



《きゅうり 8月21日》2017年 作家蔵



《不思議な力 #8》2014年 アマナコレクション

このたび東京都写真美術館では「野口里佳 不思議な力」展を開催します。野口里佳は1995年「写真3.3㎡（ひとつぼ）展」と1996年「写真新世紀」展でのグランプリ受賞以降、〈フジヤマ〉（1997年–）、〈飛ぶ夢を見た〉（2003年）、〈太陽〉（2005–08年）、〈夜の星へ〉（2014–15年）などの写真・映像作品を国内外の展覧会で発表し、国際的にも高い評価を受けている写真家です。野口はこれまでに、水中や高地、宇宙といった未知の領域と人間との関わりをテーマにした作品を手がけてきました。近年では、日常や周囲に満ちる無数の小さな謎の探求を通して、見るものの感覚や想像を解き放つような表現を追求しています。写真と映像、ドローイングによって構成される本展は、初期作品〈潜る人〉（1995年）から最新作〈ヤシの木〉（2022年）までを出品作品に含み、時間や場所も超えていく写真の「不思議な力」に導かれるように、野口がこれまでに会ってきた様々な現象や光景が描き出されます。その独自の作品表現に触れることは、それぞれの存在がこの世界に生きていることの意味を見つめ直し、また写真・映像のもつ「不思議な力」とは何なのかを考えるきっかけとなることでしょう。

野口里佳 | Rika Nogichi

さいたま市出身。那覇市在住。1992 年より写真作品の制作を始め、展覧会を中心に作品を発表。現代美術の国際展にも数多く参加している。2002 年、第 52 回芸術選奨文部科学大臣新人賞(美術部門)を受賞。国内での主な個展に「予感」(丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、2001 年)、「飛ぶ夢を見た」(原美術館、2004 年)、「光は未来に届く」(IZU PHOTO MUSEUM、2011-2012 年)など。作品は東京国立近代美術館、国立国際美術館、グッゲンハイム美術館、ポンピドゥ・センターなどに収蔵されている。

みどころ

1 すべての作品に通底する“不思議な力”

〈不思議な力〉は 2014 年に発表された、重力や表面張力、磁力など目には見えない力を小さな実験で可視化させるシリーズのタイトルですが、野口はこれまでの制作は、すべてが“不思議な力”についての作品だったと振り返ります。“不思議な力”に導かれ、海に潜り、山に登り、アフリカへと旅した野口は、近年より身近なところに対象を変えても、写真でしかできない表現を追い求める姿勢は変わりません。純粋な好奇心を追求し、独自の視点で写し出される野口の作品は、私たちがいるこの世界が、小さな驚きと発見に満ち、そして美しく豊かであることに気づかせてくれます。

2 初公開の新作、近作から過去の代表作まで 野口里佳の現在地を示す展覧会

5 年ぶりの個展となる本展では、新作〈さかなとへび〉(2021 年)、〈とぶもの〉(2021 年)、〈ヤシの木〉(2022 年)に加え、〈不思議な力〉の最新作を初公開する予定です。そのほか、この 10 年間に制作された近作、〈潜る人〉、〈フジヤマ〉といった過去の代表作を 2022 年の視点から再構成します。

3 写真、映像、ドローイングにより会場全体がひとつのインスタレーションに

〈不思議な力〉から始まる本展は、写真作品を中心に、近年取り組んでいる映像作品、そして展示壁に描かれたドローイング、それぞれの作品が呼応し合うように配置されることで、野口作品の全体像を体感できる展示となります。

出品作品

■ 〈父のアルバム〉 2014 年/2022 年

〈父のアルバム〉は 2014 年にギャラリー 916 で発表された写真シリーズ。2022 年には写真集として刊行された。野口は本作を制作する前年に父親を亡くしている。野口の父はよく写真を撮る人だったので、たくさんのネガが遺されていた。生前に譲り受けていたネガを野口は自分でプリントしてみることにしたという。「ネガは新婚旅行から始まり、私が生まれ、弟が生まれ、妹が生まれたことが記録されていました…暗室でネガに光を当て印画紙に焼きつくと、その生々しさに驚きました…それは父の視線を追っていく不思議な体験でした…父の写真は父と家族のためのとても個人的なものです。けれど私がプリントしながら味わった幸福な時間は、写真の持つ不思議な力として、誰かに伝わるのではないかと思うのです¹」と野口は述べている。野口はこのシリーズをきっかけとして、写真には過去と現在という時間の隔たりを超越して、他者に体験したことや感じたことを伝える「不思議な力」があると考えようになった。

■ 〈不思議な力〉 2014 年—

野口は父の遺したカメラで自分の日常を撮り始めた。そのカメラは 35mm フィルム一本分(36 枚撮りの場合)で 72 カット撮影できるハーフサイズのオリンパスペン F である。〈不思議な力〉のシリーズは、2014 年ギャラリー916 の個展で〈父のアルバム〉と対になるシリーズとして発表された。野口はこのように述べている。「日常は目には見えない不思議な力で溢れています。けれど目には見えないので、なかなか写真に写りません。見えないけれどそこにあるもの。それをなんとか写真にしたいのです。そしてその写真によって、今いるこの世界の豊かさを感じられる、そんな作品が作りたと思っています²」。

野口は科学実験のような行為によって生じた現象をカメラで接写した。小さな世界の中で、作家自身が働きかけることによって生じる現象を「不思議な力」として可視化しようとした。このシリーズに写された現象を言葉で記述すると、たとえば以下のようなものになる。「表面張力によって、紙のコースターが逆さまにしたコップに張りつき、中の水が落下しない」。「スプーンを磁石でこすり、金属に本来備わっている N 極/S 極を整えて磁石をつくる」。「生卵がコップに入った水の真ん中ぐらいで、沈まず、また浮き上がりもせずに静止している」。

野口はこれまでの自身の作家活動が、写真という「不思議な力」に導かれた旅であるとの思いから、本展のタイトルを「不思議な力」と名付け、あわせて同シリーズの新作を 8 年ぶりに制作、発表する。



《不思議な力 #8》2014 年 アマナコレクション

■ 《アオムシ》 2019 年(映像作品)

風にあおられ、空中をゆっくりと浮遊しているアオムシの動きをとらえた映像作品。アオムシは透明な糸で何処か周辺の木の枝とつながっているようだが、その動きに注視しているうちにまるで重力に逆らっているかのような不思議で自由な動きをしているように見える。2019 年に宮城県の牡鹿半島と石巻市市街地を中心に開催された「いのちのてざわり リボンアート・フェスティバル 2019」で現地に滞在し制作した作品。

■ 《虫、木の葉、鳥の声》 2020 年(映像作品)

《アオムシ》と同様に、クモの子、羽虫、木の葉といった森の中の小さな存在が空中に浮遊する映像作品。それぞれの生態や形態に応じて、虫や木の葉は漂い、羽ばたき、回転する。展示ではそれらの映像がランダムに並列されるため、形態や運動の面白さが時間体験として鑑賞者と感じられるようになっている。この作品は 2020 年に札幌文化芸術センターによる西 2 丁目地下歩道映像制作プロジェクトのために制作され、現在³でも地下の歩行空間で上映されている。森の中の小さな世界でよく観察しなければ見えてこない、ささやかだが多様な動きをループさせて、複数の大画面で提示し、共有体験を作り出すこの作品は、シンプルさの中にも野口らしい映像表現の不思議さを感じさせるものになっている。

■《きゅうり》2017 年

きゅうりという植物の成長を観察すると、茎や蔓が日々方向や形態を変えながら変化していく様に小さな驚きを覚えることがある。自ずから育っていくことと、実験によって現象を生み出す違いはあるが、この作品は〈不思議な力〉のシリーズと同様、日常に潜む見えない力に野口が注目したもの。タイトルには日付が入っており、2点組のそれぞれは8月21日と8月22日の二日間だと分かる。誰もがやったことのある植物の観察日記を連想させる作品である。

《きゅうり 8月21日》2017年 作家蔵



■《クマンバチ》2019 年

《アオムシ》とともに「いのちのてざわり リボーンアート・フェスティバル 2019」で制作した作品。野口が撮影をしていた牡鹿半島には鹿や雉などの動物だけでなく、蚊や蜂、ヒルなどの虫がたくさんいたようだ。「当初野口はその虫たちからどうやって身を守るか、遠ざかるかについて頭を悩ませていました。ある日を境に野口は、その虫たちと写真機を持って向き合ってみることにした、と言います。そしてそこにとらえられたのは、野口に追われ逆に逃げていく熊ん蜂の姿や、風に吹かれながらも懸命に生きる小さな生物の姿でした⁴」。〈クマンバチ〉のシリーズは、それまで怖がって避けていた「虫」という存在に野口が目を向けるきっかけとなった。虫との関係性の変化こそが、その後に続く小さな世界に目を向けた映像作品を生み出したと言えるのではないだろうか。野口はまた「胃カメラは小さいものを撮るのが得意にちがいない」と考え、これを機に胃カメラを改造した特殊なカメラを用いて作品制作を行うようになった。

■《ヤシの木》2022 年

きゅうりという植物の成長を観察すると、茎や蔓が日々方向や形態を変えながら変化していく様に小さな驚きを覚えることがある。自ずから育っていくことと、実験によって現象を生み出す違いはあるが、この作品は〈不思議な力〉のシリーズと同様、日常に潜む見えない力に野口が注目したもの。タイトルには日付が入っており、2点組のそれぞれは8月21日と8月22日の二日間だと分かる。誰もがやったことのある植物の観察日記を連想させる作品である。



左：《クマンバチ #1》2019 年
東京都写真美術館蔵

右：《ヤシの木 #3》2022 年
作家蔵

■ 《夜の星へ》 2015 年（映像作品）

本展の展示空間の中央に位置する部屋では、映像作品《夜の星へ》が上映される。これは 2014 年に撮影された同名の写真作品シリーズから派生した作品である。写真作品は、雑誌『SWITCH』の荒木経惟特集で車窓からの撮影を依頼されたことがきっかけとなって制作された⁵。野口は父の遺品であるハーフサイズのオリンパスペン F を使用し、当時拠点としていたドイツ、ベルリンのスタジオから自宅まで帰宅する途上のバスの車窓を撮影した。現像したフィルムのコンタクトシートを見ると、ベルリンの街はまるで宇宙の星々のように輝いていた。そのフィルム 1 本分の写真を編集することなく、まるごと掲載して一冊の本を作ったものが写真集『夜の星へ』である。野口はこの〈夜の星へ〉シリーズを、〈父のアルバム〉〈不思議な力〉とあわせて「ペン F 三部作」と呼んでいる。そして写真作品の 1 年後、野口はキヤノン S ギャラリーで開催する個展のためにデジタルカメラを使用し、同じ道を動画で撮影した。これが野口にとって初めての長編の映像作品となった。



《夜の星へ》（映像作品）2015 年 作家蔵

■ 〈潜る人〉 1995 年

この作品は野口が写真家として広く認められるきっかけとなったシリーズである。私にはこの作品が、野口の踏み出した未知への旅の入り口のように筆者には思えた。1995 年、野口は作品制作のために京葉線をひと駅ずつ下車して写真を撮っていた。ある日たまたま潜水服を着て海へ向かう人の姿を見て興味を覚え、その人を追いかけることでこのシリーズは始まる。その時に持っていたカメラは初個展のときに来場した見知らぬ人からもらったという「ワイドラックス」というパノラマカメラだった。「初めて、ダイバーに出会ったのは冬の日。その姿は月へゆく人のようでした。不思議だったのです⁶」。野口はこのように述べている。〈潜る人〉は日常の延長に非日常の領域があること、未知への扉がすぐ近くで偶然に開かれるという感覚を見る者に喚起させる。野口は「月へゆく人」に付いていった。その時にたどりついたのはダイビング・プールの底だった。



《潜る人 #1》1995 年 作家蔵

■〈海底〉2017 年

この作品のために野口は初めて夜の海に潜った。夜の海中で光の進む様子を撮ろうというアイデアを持った野口は、三脚とフィルムカメラを持って海に潜りこの作品シリーズを撮影している。夜の海底に降り立って、20 年以上前の〈潜る人〉の時には、たどりつけなかった海の底にようやく到着したと野口は感じたようだ。すでに野口は〈星の色〉(2004 年)でも与那国島のダイビングで海中を撮影しているが、「いま月を踏んだ」という、まるで月面に初めて着陸したアポロの乗組員のような思いを実感したのは、〈海底〉においてである。本展では一つの長い旅の入り口と到達点のように、〈潜る人〉シリーズと〈海底〉シリーズからの 1 点が並んで展示される。その 1 点は、人工の光がまるで太陽か月のように、暗い海底を静かに照らす印象的な写真である。



《海底 #1》2017 年 大林コレクション

注

- ¹ 野口里佳『父のアルバム』赤々舎、2022 年、n.pag.
- ² 『父のアルバム／不思議な力 野口里佳』展覧会リーフレット、ギャラリー916、2014 年、n.pag.
- ³ 2022 年 10 月時点
- ⁴ 『リポーンアート・フェスティバル 2019 公式記録集』アートダイバー、2021 年、p.106.
- ⁵ 『SWITCH』第 33 巻第 2 号 (2015 年 2 月号)、pp56-63.
- ⁶ 『写真新世紀 第 5 号』キヤノン株式会社、1996 年 7 月、p.23.

出品点数

50 点 (写真 46 点、映像 4 点)

展覧会図録

「野口里佳 不思議な力」

A4 変形・価格未定・148 頁／発行：赤々舎

吉本ばなな（作家）、石田哲朗（当館学芸員）によるテキストと出品作品図版、会場インスタレーション写真を掲載して 11 月上旬に刊行予定。

関連イベント

アーティスト・トーク

登壇者：野口里佳

日時：12月16日（金）18：00～（予定）

会場：2F ロビー

開催概要

展覧会名[和] 野口里佳 不思議な力

展覧会名[英] Noguchi Rika: Small Miracles

主催 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

会期 2022年10月7日(金)～2023年1月22日(日)

会場 東京都写真美術館 2F 展示室

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

電話 03-3280-0099 www.topmuseum.jp

開館時間 10:00-18:00(木・金は 20:00 まで) 入館は閉館 30 分前まで

休館日 毎週月曜日(月曜日が祝休日の場合は開館、翌平日休館)、年末年始(12/29-1/1、1/4)

※12/28、1/2、1/3 は臨時開館

観覧料 一般 700 円/大学・専門学校生 560 円/中高生・65 歳以上 350 円

※小学生以下及び都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者(2 名まで)は無料。

※1月2日(月)、3日(火)は無料。開館記念日のため1月21日(土)は無料。

※オンラインによる日時指定予約推奨

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。

掲載をご希望の際は、広報担当までご連絡ください。

*図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。

*図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。

東京都写真美術館

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM 電話 03-3280-0034/FAX03-3280-0033

展覧会担当 石田

広報担当 池田/ 平澤/ 鈴木 press-info@topmuseum.jp

本展は諸般の事情により内容を変更する場合があります。最新情報は当館ホームページをご確認ください。